

田舎芝居書目録

後編

下

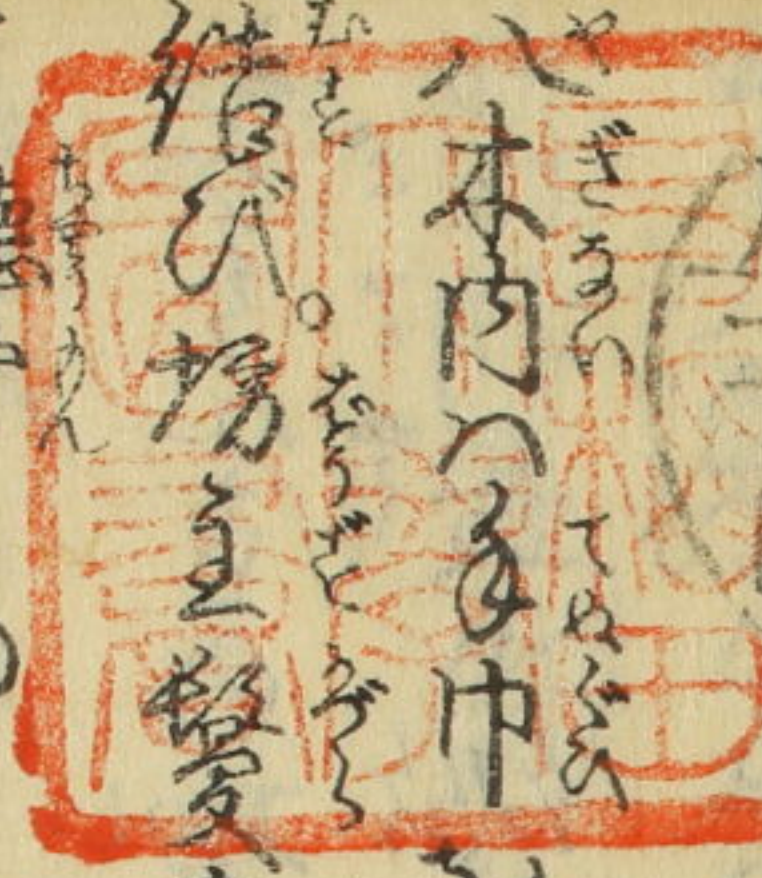
^ 13
3720
4



門へ13
號3720
卷4

田舎芝居忠臣藏二編卷之下

江戸戯作者 式亭三馬戯編



本内やぎらひのてはな中なかにとまろありと冠かぶして。耳みみのゆるゆるゆる引ひき造つて
かた信しんのあ早はや振ふるあり。玉たまへく。相あ早はや比ひ向むか信しん公こうのあ起おこ
てと聽き安やすさろうし中なかに色いろ。うらうらが鏡くお後ご義ぎさ。相あ高たか振ふらうん
とふかさのへでる変えで結へ。あんがれ波なみがま色いろ道みち信しん公こうの
軍とづら。高たか堂どう向むか邊へく侍て。耳みみのあ宛あさかりおぢぢとさ。

田舎芝居忠臣藏二編卷之下

下

夜鷹道遙と好む益の趣更と樂むるうらうらと。
 昼三尊佛由來迎狸秘りの枕よふあひてモ五室う
 森さんしうと愛助の告のありがら次身。後生さんと
 おがまんとの功力むるうらうらと。義理一遍上人千枝を清
 の利益不仍て。口舌のさきごと如來とねまきのみむご
 四十八願まゝのち佛の方便とやと不依院まきとべい
 うら。ゆらくと聽受さんしん。戒名俗名お志
 次第。極樂の大福帳。地獄の出入帳不記しきとぞ。

冥加残く。八本内一。只今志ま不信の願主。千三村
 とまら。家内總命不足だけ。別ておけく慕れ
 中ごつきの諸精意。へげたま院頓痴氣だりむく信士
 頓死紙「コレ」。おまがとをりゆめ。不きまを計り
 「そんなら」
 「由田向」
 「如來」
 現當も益。なん中まごぶ。あんな中まごぶ。
 法堂一面の聴衆一家諸精意あひび六親眷属有縁

無縁乃至法界平等利益一蓮花生たむあまご仏さま
まづう人も早くと皆奇特小系詣のうまらまご。まづ
早ゆらさうあいて自も他も才ふよろこぶへさるるけ
芝居の中さまで佛法之味「あむあむ」それさおち
五穀豊饒年くまらうちつづくゆゑおあなく酒酒さ
らん天宮で四百のおちあうくさ抱て枕と安く寐りやすこ。
是則不可思議無量。仏あゝね輝の恩徳。譬や海の
目洵り志るまをうとも。女島中くお侍の道理あしこ。

女房のち女房の由昔芳さる。これさまのち妻方論ご如來
亭に成をくひさうんとの由誓願「あむあむ」自も他も
田くの業をつらめ移へば佛も長者あもあまぬるうで
ござる。只今八本内イシヤ愚僧か鏡法法候後長。志のわく
ごさまぞ不説て聽するも。惜の欲い食て飲てとあふ元更
んあさ中いふ。あまをねあがあるご。是さまのちら仏を
り物でござる。後生大夏や命あや。他の悪う色我
よろ色死でも命のあるやうあし。石のあふたやまご預ひ。

檀方と勤めても。且家も又荒神あつて。らきなく
 大異人。錢がとらるる。あるまじい。金銀恨が教くあれど
 そことららぬが佛の行。一ちむあも。一は末世の流
 ず。孤助んたり。勿体なくも。釈迦牟尼世の南天竺
 波羅那國三所目の大長屋九尺二間の棟割小なる其
 むろ。阿羅く仙人の年季なる。は久らき。朝の峯
 中の薪を推り。女の流中の炊火をお汲する。難行
 昔行の苦耐ふ。釈迦折きて宣く。たとい野ふも。山小

卧。一。虎伏きて。其の末までも。飯も禁まよる。福も
 提まよる。夏でも巨燧小あつり。まよるとか。現あると
 色。一。ちむあも。一。佛法の見徹小。大衆と唱ふる文
 字。一。大まきく。衆と刻む。又小衆とら。一。文字。一。小く
 毎あると。刻む。大まきくても。小くても。毎ある。福がまらぬ
 男女の煩惱。一。ちむあも。一。其ら。一。可憐のが。流小
 ころ。まよる。夏。名流と道行を。け世うら。ある。刀山。二
 世も。一。世も。其ら。一。世も。今交の。く。むろ。と。今交の

又後の世も。かゝるまのぞや。かゝるじと誓ひし。福も及吉
 となり。ひまろしとけ世が二世目なり。さうせう。斯うせう
 悪やつてや。死でまゐりて又死で先で。あやや。遇ぬ
 中。左やう右やう。こちやあつて。ぬと。現世で。まゐりて
 「あやむのこ」^{ハ本}「死ね死ね。まゐりて。後世の習俗。り。正直
 なる者ありて。死ね死ね。うとの約束あり。べ。あやむの波の
 だんぶら。けし。居て。樂む。あど。あり。かゝる。あはし。
 あふ。かゝる。あやむ。と。あやむ。女も。あち。ま。あ。成。仏。の

地獄の苦慮。そのや。可。あ。の。ぢ。や。あ。の。後。の。ぢ。や。と。現
 「あやむのこ」^{ハ本}「あやむのこ」^{ハ本}「現世。あやむのこ」^{ハ本}「あやむのこ」^{ハ本}「死ね死ね。まゐりて。後世の習俗。り。正直
 なる者ありて。死ね死ね。うとの約束あり。べ。あやむの波の
 だんぶら。けし。居て。樂む。あど。あり。かゝる。あはし。
 あふ。かゝる。あやむ。と。あやむ。女も。あち。ま。あ。成。仏。の
 地獄の苦慮。そのや。可。あ。の。ぢ。や。あ。の。後。の。ぢ。や。と。現
 「あやむのこ」^{ハ本}「あやむのこ」^{ハ本}「現世。あやむのこ」^{ハ本}「あやむのこ」^{ハ本}「死ね死ね。まゐりて。後世の習俗。り。正直
 なる者ありて。死ね死ね。うとの約束あり。べ。あやむの波の
 だんぶら。けし。居て。樂む。あど。あり。かゝる。あはし。
 あふ。かゝる。あやむ。と。あやむ。女も。あち。ま。あ。成。仏。の

の蕃椒辛まきり見せしる赤鬼青鬼あつひの祟ある
 の踏考茶のみ紅くけ死色たるもの新形の鬼か出て
 阿方羅刹ちやくむちや。親代くの位牌所を粉
 粉微塵小踏漬ま。呵責の鬼の目小くも外小思案
 のあつ洞。あつ色とりもあつたり「あつむあつ」
 けきつめさくろ。十方億土の長藤小連かろーさの
 吾分別後虚の風小誘ひきて。あつとあつさか別お院
 佛「あつむあつ」
 一鬼角迷ふ色の道よとてふ其むし。

大儀の虎巾着に松坂の少将とり。姉妹の美女がござる
 と。其の頃美男かき色たる兄小一方生長て曾我十郎
 祐成。弟小箱王。生長て岡五郎時致と名告る。け兄
 弟小姉妹が馴染れど。いづれも秋小あつでさつづきで
 ござる。夏あつ。伯夷福清とり二人の白拍子がござるこ
 拵け姉妹が容体とさうさび色くらきりと白く。鼻筋
 の額際くさのぎろくまで通つて眼のまぶさあつる
 の魅の目を尻汁で洗つるがごとく。さびせ茶葉生すとさや

牡丹。あつれまどこの百合の死とありしきらふ。是ま
 つち善男ぜんなん子善女ぜんにょ人ぞござる。一さむあも一さつてその
 二人が美うつく廉れんの肩かたされ。むざんするうれ虎少将こしょうのさうけ
 ちかして三下り半さんげはん「さむあも」一さつてちや虎少将こしょうの
 二人のあけられふら中ちゆういぐで。かさりちのちひんかを焦こ。
 眼まなこの涙なみだながりまをころとあまごき拍ひまふとあつて。
 つらふおのれさうころさのであつてさうと。然しかびふまを
 かけ飛とぶぞとええいぐ。一瞬ひとしげの間ま小地獄せうじやくへ落おつ其時そのとき

闇魔あんま大王おおうあの幕まくふ画えと通り。將しやう法ぽう持ぢあどみ眼まなこと分ぶんと
 えひくき善哉ぜんざいく。汝等なんぢらが只今ただいま中ちゆうでのあぐぞめくぞを。
 ちんでるぞとのあひ。業ごうの秤てらふけ津つ願げん梨りの鏡かがみ小
 うつて。罪つみの次つぎすむとさうりあふ。一さつてちや一現在げんざいを不
 くの客きやくがたすて。せびりあつる鏡かがみ金のかねの大蛇おほいへびとあつて
 五ご体たいをわらふ。はまならの音ねがゆて。後のち日ひ物もの日の火ひの
 息いきを吐はけ。指ゆびを切きらん。髪かみを切きらん。さるあり
 さる。あそしかなんどあつらさうり。一さつてちや一虎少将こしょう

中のこゝちあまのすめらぎんぶつらなアまめごと 八本 「あんまのどア」

「あんまめく」あんまめどア 八本 「弥陀願以汝功德平等

施一切回」早家より止る」女の息がききこへ 八本 「丹々

「あんな大いさゝかの声のこ 八本 け換姿のしろふみくろ 八本 毒菴老の急病

ゆてそこのすまゆくれなるままかかんぐ色男小あひふくるるるるふふ名うて

のままのゆく朱塗の櫓小まきつけのうんざり 八本 秋市小あつこ白ひあぶら

べくくはつけに戸のゆるゆる 八本 びんさう 八本 志のび男のみんが切

けそい紅粉のふりの層々 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

あて小便 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

様姿のしろふ 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

たぐりつけが 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

らたんと 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

ぶんぬけさ 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

風 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

うら 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

なるべの思つて 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切 八本 志のび男のみんが切

爺おやさるが奴やつで濁酒みづり酒と制衣せいぎ入いらうし申まをすよふ。江戸えどの箱はこ又また度ど
 うう猪いの白しろさ呉くれさうしつア。さる交まじわぐくと雲うみとひいて
 引ひりけりかきど。それさ小卒しんそく抱いだある誰だれらおとエ。あらア
 そらわどん中ちゆうとさ中ちゆうまよ。トとまままままま。ニヤニヤそりやアア虚うつ
 ぶつべい。そんなうあで役者やくしやども小死こしと申まをころ。ガキガキ藍あい
 紙かみとまねた注つとさうううあ。勘平かんぺいとと徳松とくまつふ氣きが
 あるぶつべい。徳松とくまつやらうの業わざ石面いしづつりが勘平かんぺいふ扮まつさる
 がとじしいにーが眼まなこああの業わざ石面いしづつも眉まゆ目めもくんとえべいら

あつち移うつが。ううがあやアさくでも移うつ。あまが好このどどま。
 へへ氣きの多おほい女おんなももアアふふんんささが。ああが極きよくるるアアんんささももが
 移うつ。江戸えどでさう裾張すそぢやうさ。あふこの枇把いちば葉湯えんとう女おんなめが。
 屎くそがわさまらう。ああと夏なつ川が岸がの店あみだ女郎ぢやうらうふささ
 どうぞんべいう喉のどををああ人ひとととだだままささべべいいぞ。ああんんああくく遊あそ女ぢよ
 買かひ女おんなとといいめめけけどどまま等らうすすよよりりののまま実じつががああるるよよアアハハアアそそな
 けけいいとと成なるるアアんんままああのの花はなささききららアアハハアアがが分ぶんかか
 してして爺おやさるるががききららこのこのででどどううアア。何なんででううがが徳松とくまつととん

ふ氣があるべいの爺たーと云とげをい法もあれ。禪ぜんと
 と申す禪ぜんつごとし申すぢやござん後入。今やういふをド
 まつていふでもなう。どうか公座こうざのどうとさうするの
 大概たいがいも色いろをいふ。どうかがるの棚たなとよきで。まじり
 うまが方もたんでる。ござん。あめはたんでる。禪ぜん
 道みち入いりとらう思おもつて。どうかたんぬ。方かた一いち根道こんどう入いりと
 ざう。わーこの法ほふを同當どうたうめして。今半道いまはんどう半はん後ご入いりの
 一いち洒落しやれつおでござんぬ。まじりまじり人の容ようとるふ。

維い編へん緬めんの禪ぜんハ維い小せう世せらうとたアエ一いち見けん是ぜうア。トサ一いちそれさ
 一いち是これエバ。あうが買かうこのよ一いち處ちようあうり一いち申まをな一いちあふ處ちようが
 おんぬぐべ一いちコ。あるめと思おもつ一いち申まをら。其その禪ぜんハ夏なつ戸と川がわ
 岸かたのまが馴な染せん居いるハ女郎にやうじやう枯かうと世せらうとちよるア。疾はやお
 早はやめからんや。一いちあめ。そやうやうまはちよるら返かへ
 して。絆きんを養やううせむのちよ保たもつ人の禁かぎ付ける一いち須す臈らふ正せい
 氣きふらけるのがあつて。一いちイニまじりでも後ご入いり証しやう據この
 ちよらうと申まをす。今いま半はん後ご入いりの禪ぜんハ女郎にやうじやうのちよらうと

日蓮聖人御成道御成道御成道

禪ぜんとら。まが禪ぜんの蕎麥そば切き色いろふあつこと笑止わらじとて。まが
あつと禪ぜんと布ぬい布ぬいふ解とてまが合あせてまがとらとげと。
其その新あらた授たまめ禪ぜんの生せい中ちゆうが継つであるちふるままでやま。
何なんと見み通とお一の法ほふ下げ振ふえんべり又またまがまが買かつふお遠とほ
たうべ。只ただ今いまとて引ひがらいてえせまらせ。利りはまはイ
まいてもこれむうのあつらひ。サアどうとま。イヤ。そのヤア
終つひもなあつらうて替かり入いりんでも移うつるがハテサ。云いひ
あやアまのヤア移うつる。まがまると早はやく坊ぼうイあつらうと

那なト移うつたるちどとまあ。まがまらういりてえれぬ夏戸川なつとが
岸かたくま異ちがれえんご。まがまらとま。夏戸川なつとが移うつるへんをう移うつ
移うつるあつとまがあつらう。かじとかうまの人の移うつらうと
まがまらうとまがまらえ。それえんせ。まがまらう。あんお
まや。あんおまや。男おとこちひのりの斤しん時とき眼まなこが離はなるは移うつる
いけ中ちゆうまらうとまが面めんで塵ちゆうじんとまがぬくまがまらうと
緋ひ縮ぢゆう緬めんの色いろとえせ。あつらうとまが神農しんぬう桑そうの飯いひ
と登のぼるまらうと土器つちけ色いろであつらうとまが黄わうのまらうと

おちくがめえりつさ。あんのをあま理で世つこのよ
 「あんであま理がらるべし」ハテちりりしんま。あま理く禪ん
 かくさき禪んちりりあまご「又洒落る。聴くても禪んト
 たり合ふしうへ成三布が舞で
 せんどのあやふしがありべさ
 悪さるゝあまト接へあまらるさたあちりありしをされてひのうろくく
 へたみあが身をくらせが小はつあへまうさうさあ
 「あまのこ」かまひととごごりりト
 ト折る舞其臺ふらり拍子あへ忠臣藏四段目の幕明
 ▲本舞其臺へ四五間の間正面和尚の居向なる襖と

をぶくしつるとあがくくハ功德池の伴相池水蓮華
 のをくくしつる繪ふまも五六枚た右へ行とくつ
 かくげつけつる内佛檀の花瓶小唐瓶で製する蓮
 華の挿る盆坐の中あふさあり有これハ鎌倉山の
 八重九重のくく接をたかごふ挿りしるふ入合せと
 見えしう通例の幕明たうくバ奥方かあよれ茶あ
 中この侍女ふうづう色は傍あへ大守力強個えさる
 場あれどもいふの心のさなるや張統の大匠瓜

冠むすアアるるででききカカ孫孫一人一人上上下下衣い装さうああくくままああかかまま

ああままああくく甲こう忍にん念ねん仏ぶつのの合あ方うああままアアあありりだだアアんんぶぶ

ドドドドチチキキチチキキチチキキチチキキのの物ものああくく幕まく明めい

▲幕まくもも明めいけけばばととどどふふ千せん景けいをを借かりりああままにに答こたええたたれれども

竹たけ茶ちゃ飯はんををままのの時とき目め終しまりりてて床ゆかううくくああままのの

ふふくくああままののああままををああけけけけ眩め暈うんははじじてて養やし食しょく生せい

室むろ中ちゆうのの代しろりり段だんああけけ幕まくのの後ご孫そんがが勤しんむむ

口くち上じやう東とう西せいのの中ちゆうままささとと

ハ別わく義ぎででももととどどりり中ちゆうままささととノノ幕まくのの茶ちゃ飯はんををままのの声こゑをを

いいららななささだだくくるるふふ合あせせふふももががああままののせせままををべべいいががひひののええなな

るるああののああままをを痛いたむむ中ちゆうままささとと。只ただ今いまままののままののいいららななささ

ととりりままをを則すなは代しろりりのの當あた村むら内うちででののおお馴な深ふか後ご

孫そんのの竹たけ茶ちゃ飯はんををままのの勤しんむむとと志し後ご孫そんののああままののああけけ

なな内うちううのの守まもりりももああままののああままのの今いまままのの明めい盲もうででととどどりり。ままささととうう

本ほんををりりももだだりりととままりりてて暗くら記きでで借かりりままささととがが行い言ごんもも

ああままののととどどりり後ごへへはは津つ瑠る璃りををたたのの千せん景けいをを借かりり

千人の... 一三三

此伴判の報上すまを。東西くく引。床でかちりたり
トのふと テレクク
後秀子ヨホ ○鷹の死をもとも穂のつまむと

碓氷のふりきまをへる月や。こくをこれの五段目ぢりへの
後秀子ヨホ 塩治判友平氣

不碎て扇が四つの上屋交割竹ふく戸をとら疾中
の弁へ出入と止め夏涼着ふくえふたり。トト。ト

のあそび。奥の方へかちよゆあ。トひりたりてかちるあへたを
七之進の舎身八瓶内着

切申しよりし

かちよゆ家のす扮の奴あこまふは家の袴巻引しり

波女さゆの着の項きとるあちとさ大振袖を梅の
まふふきとらふ文章を向よりふ漆ぬのさ馬糞

色たり田舎とあらふ柄の長いたとと後中し
花道中て陰踊ありけ時あつくの喫仙臺淨瑠璃

チト つり合のさるれど當人のさまゆ下中せれば
さしあつらでさあちあちりやせく 合意

たぐひふらふてしるる

かちよのあは始終どどりのありさる
さまあいのうらみごとく仙臺澤より

きれて幸舞臺へ 一柳のるの廊下とつらひ。諸士がしら

原々を歩つり。あふつて斧九をまじり。一人く切きよりある
かちよのあふらふりて

「コサを中へさしよとらひせよ。ハア幸が

機嫌うらみ。由之美く。うらと固ちふ。あこの望みへ

来せよ。奥板の由材嫌うき絵どどり。九をまじり

とも我が折色中へ。サアまじりおやうへ。侍らふり

まじりり。ト申すゆりゆり三人同道ゆ幸舞臺へ
それくふしきる々々ちり力強よむくみ

とも。か縁どんふん。けいお早くとどろく。うらとア子の力縁役の思
ところ

七十余輩ゆて葉のたのむをしくあやちりく。こまのあひる白粉を
まきりてとりこ。同様のあ髪うらゆてあ居りゆり。とさ。りよを指さる
さるゆあ声がりりて。カ縁ヤレ。こりやアをあ。けいごアとあひり

うら。脊門の橙。とどろ。コサを中へさしよとらひせよ。ハア幸が

く。とらひらんのあふ名を更ら。とやう。コサを中へさしよとらひせよ。ハア幸が

とらよ。あふさうどろけ。がらキヲ忘れ。ア。ともや。

幸の巻めりゆん。早が幸のふ同が埒明。あうらうら後へ

コサを中へさしよとらひせよ。ハア幸が

老ちや物どくたろて。其よふ記帳が跡いろう用ふ
 足りさ。なんど今あま一人居る肉ふ懸てあつてもぬ
 う。お日課と百遍唱やが。これがカ泳の後よカ泳「コシヤ
 むごらちイまらむとと。ワリふウき入るバカ泳「クヨ。トカ泳
 うらも又耶さるの来る肉ふ。疾直番のうらしてあつて。
 奥移小唄子を付居ぬ行よ。うらうらうら又耶さるさ
 いらふさるへい由良の助百六十六あもなるべし。
 東西く「九たままはちまうとありでござる。ト奥方ふ
 東西く「九たままはちまうとありでござる。ト奥方ふ

「九たままはちまうとありでござる。ト奥方ふ
 定年切落の見物二人おあつて
 ある。八瓶七々進どめり舎中子あどあつて。其今の陰踊の
 我ア折果さる。狂言の邪魔どんべいが。答言させて呉いさる
 甘。ちくとんをあり答言やさる。今一人の男
 中さる。聲をとて「答言頼どく。東西く。東西く引。
 ●かけ合あめ調
 ●東西く。狂言の中さ出で。邪魔を野郎ともいられへが。

ちくといんをのり^{あや} 養言まきとどい^{ちふあま} 目鼻^{いざら} 立ちあう風^{ふう} 倍する。

あんふいとくいか^{あま} ちよ^{たま} 花^{はな} ▲ 臆^{おそ} さふ頼^{たの} さふけ^あ けしこ^{ひげ} 髪^{かみ}。

● さらで野^の ふさく^{あま} 薊^{あざみ} の花^{はな} よ ▲ 日向^{ひなた} 北向^{がうこ} とめさるるごう。

産毛^{うぶげ} 屋^や 纏^め てぬけめの移^{うつ} へ ● かのくさあ^あ のい^い ごとく。

一^い ふた^{ふた} 六^{ろく} 里^り の教^{きょう} ▲ 山^{やま} で木^き の教^{きょう} 萱^{あや} の教^{きょう} ● 七里^{あな} が

濱^{はま} でい^い 砂^{すな} の教^{きょう} ▲ ち^ち らる^{らる} 小^こ 社^{しゃ} の糸^{いと} の教^{きょう} ● 五^ご 及^{じつ} 白^{しろ} の教^{きょう}

の教^{きょう} ▲ 神^{かみ} や佛^{ぶつ} で^で 中^{ちゆう} さうごう^{ごう} ぶ ● 一^{いち} ふ岩^{いわ} ふち^{ふち} 地^ち 慈^じ さる

よ ▲ 二^に 西^{せい} 新^{しん} 渡^わ の白^{しろ} 山^{さん} さるよ ● 三^{さん} ふ^ふ 價^あ 波^な の金^{こん} 毘^び 羅^ら

三^{さん} まよ ▲ 四^し 六^{ろく} 信^{しん} 濃^{のう} の善^{ぜん} 光^{こう} 寺^じ さるよ ● 五^ご 六^{ろく} 市^{いち} 天^{てん} の

善^{ぜん} 宮^{みや} さるよ ▲ 六^{ろく} 六^{ろく} 角^{かく} の親^{おん} 者^{しや} さるよ ● 七^{しち} 七^{しち} 尾^び の

天^{てん} 神^{しん} さるよ ▲ 八^{はち} 八^{はち} 瓶^{びん} 内^{ない} 慈^じ さるよ ● 九^く 九^く 二^に 二^に での

踊^{おどり} のな^な ろよ ▲ 十^{じゅう} 十^{じゅう} 十^{じゅう} 十^{じゅう} 見^み て養^{やう} 言^{げん} やま ● 幅^{あし} とさる

三^{さん} 三^{さん} 思^し さるよ ● 外^{あひ} 外^{あひ} 美^み 似^に 人^{ひと} のご^ご 三^{さん} 三^{さん} 移^{うつ} へし ● 三^{さん}

敬^{けい} けい^{けい} けてさ^さ べり^{べり} やし ● 十^{じゅう} 十^{じゅう} 十^{じゅう} 十^{じゅう} 切^{きり} 入^{いり} とび^び け^け 弁^{べん} 引^ひ ついで^{いで} あり

三^{さん} 三^{さん} 二^に 二^に 人^{ひと} とも^{とも} 三^{さん} 三^{さん} 長^{なが} く^く け^け 度^ど のろ^ろ 小^こ 付^{つけ} け^け の判^{はん} 友^{ゆう} 振^び も

三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん} 三^{さん}

病氣ふたり病氣が大病小でもさうの志よめ入ると
妻あごこのの産を安い毎日染山のたさうのイえく
事もふさぶ移入梅よ。そまをうらもたなくささふ
させばいとおのりてこそえせ。ト洗瓶の蓮 け蓮華
ア、イヤ。蓮華ぶぶらさど是をまづ接のまきこ。ツレ
見ると通り異類異形の様があんづい。▲
口の肉やて一ふふ念仏してあるこ ● へんくく
イヤ。蓮華ふらう。接あらう。あいらうと開くめんざ
け内カ係いふとさう教務をい

う。表門もひくさ。奉堂吊ひも群さあうめえ透さ
る。うらも。エへ 拙者も。あんぞはべの思つこれど奥松の
鈴踊あのかたひ中移。甚九もどくさど猫まき
踊もあまむ。イヤをあふ巻用る々ちん。ヤアあんふ。モノヨ
かんどんかんめんなるが有け。エ。さ。何と。エ。何と。エ。
りの。それ。ト甘あふつらえてめくさまを 九ちまうこつらうまを付。 小声 コレ 上使どく。
市上使よ。ト。今日のお純子のお出があるげで
トきくうらうらも九ちまもこさうめて大まひとさるアつくトトらん
拍子小くちの西表の中さうがさうなりとわけ居てころくと切居の

一をん様へ
けと見物一國ふたはういとしりき居るひんりりかふる
まりの強動あり。空をまわちり傾けりひくる男け伴を

こんちて奴らうを切居より持まりうやくしく目八分おて舞止まへら
くちよれおよこらうきとくちよハ平きあてまらなりうなるゆちりりとの

をりやういせ 一は上使のごぶるハ。か後松の印文をゆるさる
中りあまき

し中りは上使であんべい。ナア九をまどん。さうちやアあん
めらう 一いん。こらちろんけんけたちいあのも。當生汁

人の目眼とこのませるまうりて風が吹やア散て志
ま入。まのり入とも其の松をぬでくのまのちとら進

がうせう進。百姓あも似合ぬ入。こく武士さやよあんべい

武士。武士さうらなまらぶ。大根みら。ふはま油

かけてるまらるへい。ナアカ糸どん。あんまらぶい。

まんまらぶいぶい。こカ糸。あんのまらぶい。あれがもを

百姓さうららる。さうねきを武士さうら。武士さうら

ままらぶいぶい。まらぶいぶい。さうらあう。おるはで

かぢらぶい。ちいもの。まら等ハ葛がたまらう。かぢらら

し中りうらぶゆの食移入。やしきびきか切まら。なんま

まら。腰がいと。對ふふか入移入。ナアねきをどう

千ヨボ 哥の意ゆるるをせ継の夜の方と云ふをぢりめて
 中へいさぶ 色るのかきき 移へるをいさぶ 判官
 移ふあぐぞりくぞろ。まの顔けいふ 神さう 地悪
 まさぬへお道理どなるのと。さうりめ入へるま
 カ強もともふれま 君の古いことありをさうへ入。
 へ外おりてふあぐらん。ちやれ 病死の古へいさぶ
 慶間ひりけい 奥へかくと通へ中り。奥方もいさぶ
 下り。三人出むるもあぐ。入るよ 使へ石堂右

馬のいさぶ 引。右馬の池の復へ同村の馬借馬をら松さう。一の布子小
 方あてむまび火の用かとあぐる 黄の色をる紙たをいさぶ ちやの申う小
 口かむまび火をうたの根付申をちやる ちやの釘をさうくと
 さげて二尺筆へさうと門出吉 踏馬馬先と漆あぐる馬のちやうけい
 どうりふあやちのあてあて小漆をさうはまちど二つ日けい
 右の方の筆へさうと 同登場の送り杯の 千ヨボ 師直が 眠近 山名
 母うぬ書と斤ふふにさうりて ちやをさう
 治常を復へ引。山名の復へ 義平次といふ五十余のちやちやといさぶ
 さうさうさうさうあてちやをさうと 切着をさうと ちやの
 ちやもあぐ ちやのちやもあぐさうさうと ちやの 復同さう
 ちや通へり ちやさうと 千ヨボ ちやもあぐさうと ちやさう
 つけ。一箇の内より 治判をさうと ちやさうと ちやさうと
 七き進

自レ髪ヲあやらかしありとりの小場を
 ちかしのちありゆてひよとろとをなま
 石堂どん。十万人あるの苦勞でもいらもどろ同金場も。
 大混雜で人足中ら日雇中ら。助々の馬もげふのるべのが。
 狂言ぶらうらうらな金もその世帯がたうてよしくござる。
 志こかすの。出来合で茶漬でも進ぜべの。こかあよ。
 ちも言いつけのさつ。まづづそれ。濁酒でも進せろと。
 二か浜。あんど。教珠什ひ糸くらて。あんのす糸と上レ百
 たり是耶の中らで行作がどりの。あらと居イ舞くして。

猪口でも壺でも持て来う上。トホボボトホボト
 びともと一献ら。積荷とらじまうえん。トサその
 賣とる。それが中一ふようんといけ山名も酒さう何でも
 揃秘。お向でも志やとべい。とたが。けち紙の文意紙文
 うらべの多辯口のいく店名どんでも。酒が咽さ通る
 めん。トホボボトホボボト右馬と遊。トホボボト二人アガお使
 小あさりのりりりど。よく聴つてあ。トホボボト懐中より出
 たらうぞ。あしひらけ判友も席とあうとあうけ

日録 芝居 二

十一

らるしやい。うらうらうがの辭さぐ。まがの私がいげど。
ふせうさうしやい。まもらうもみんや。見おさ。あの
野布め。後文の候さるが悪い。うらうらうさうらふ
候。ててんさうら。あんのえんぶ。豊板ふみさ。唐詩
選も五言絶句。袁氏が別業不題。賀知章
主人相識。らむ。偶坐林泉の為。らる。護小酒。以
清。こゝ。秋。愁。ふら。て。莫。らんや。囊中。自。有。錢。あり。
夜。趙。縱。と。送。る。揚。州。趙。氏。連。城。壁。由。來。天。下。傳。ふ。

天。府。小。還。る。と。送。る。六。明。月。茶。川。小。滿。易。水。送。別。
駱。賓。王。少。地。葵。丹。小。別。る。仕。士。髮。冠。衝。く。昔。時。人
巴。小。漫。一。今。日。冰。猶。寒。一。庭。訓。の。波。來。さ。る。春。の。始
の。津。院。び。貴。方。小。向。つ。て。ま。ま。づ。後。の。納。り。ゆ。い。と。らん。ぬ。
幸。甚。く。ス。実。諸。教。さ。る。山。高。さ。か。ゆ。る。小。貴。う。ら
む。樹。あ。る。か。も。多。小。貴。一。と。ま。サ。早。引。第。用。さ。る。初。め
か。い。の。一。さ。用。文。章。さ。る。改。曆。さ。る。古。香。慶。千。里。同。風
目。出。さ。る。紙。の。ス。あ。ん。で。も。後。物。さ。る。う。ら。う。ら。う。さ。る。後。ち。ふ

物ア移へ。馬借まじやくの馬ま左衛門ざゑもん等らか山名治やまな治ち希きなるも三さんが
 強つゑへあんのま移うつと。あつゝふいふの彼者かの志こころるね言いふ
 えんこもなつて。猿さるが人ひとす移うつとア。そのゆがらむ後文ごぶんが
 後文ごぶんが後ごもや同どう在ざい場じやうのたき湯ゆどんら。陣じん見みふえて
 りらエ。▲舞臺まいだい東酒とうしゆく。○けしやをまうつけて馬まをんが從い中ちゆうの
 半はん松しょうくつゝ男おとこうけまうてよらうが
 牛うし松しょう 己おのれと治ち希き。あゝ先まう刻きやくうらたのこどつぐが。
 前まへふが意い氣き遺い恨こんでうらうが從い中ちゆうの馬まをんをやり

こめりごと。にしよまをどかこつふ山名治やまな希きも移うつまへ
 めでもたうてあうと。男おとこあうて出いてね言いふくくうらうと
 手て三さん 一いちよりね言いふ出来き移うつか。後物ごぶつごうと治ち希きらうら
 後ごでえんぞい。うらもいへへ出いて學問がくもんもちらうらうと
 りんご。頓とん智ち發はつ明めい八はち等とう見けん一のりんごうらうと治ち希きら
 出いせし。お臺たい看かんるものか側わきも流ながるさりんご。あんど
 たのけとね言いふの熟文じやくぶんごうらうらふよせらよ。あ
 とあ後ごでやべい。いふと學問がくもんとごうてまこりんご

牛松 三ッめが江戸で学問をまがいらるる者移るるも
 江戸でらるる狭組の中へ遠のこのんであつたら
 の中の字もまがらんと今交等田舎へ解る遊もなま
 友達が二三人も連れあつて来て。今もつても同士不見
 ちてある西で。あらがやうな日向奥中らうごも不従身
 のまをぢりぢりつこちやア面がたれ移入。ああもい
 るの移入。サア歩たろ一歩の門へ出てさけをほけとい
 三ッめあもいけをほける由かよを移入けまかきか

牛松 ハイ子あくるりなん移入。サア石をさあらつて
 連れ入もまがらんと三ッめサア石をさあらつて
 野郎め。トりの西へ牛松か友らと江戸者のらまが
 三人けといとまがらんと移入。三ッめ
 牛松まがらんとまがらんと三ッめ移入。うらま
 うらまらるるまがらんと三ッめ悪くまがらんと
 どのり移入風空ア明てらまがらんと三ッめ思
 めら。下らぬア交なりのまがらんと三ッめ何
 三ッめこのご三ッめまがらんと三ッめ移入。まが
 らんと三ッめまがらんと三ッめ

田舎芝居二編

十一

牛一頭牛一頭入入きもあつて移移横横の倒倒り張張くらけく。

トりのせて牛牛ねまうねまふのふらうをたてこのあまを是とせらるる
スガハの色色をぬれてとりまゝなる申申うたしく申申スガハをぬりてとりたれが
くく申申入入りけりてまぶあまへりまゝなる申申の務務コトエうぬくふ
りまゝの務務まゝりれどもあ家のあまをぬりてまゝなる

誰誰ごとあつて羽羽をこきとま申申がらる。申申子子のあり

がごとあや。二丁町二丁町の中中ぐらうをほらんてま申申川川と

らまゝると水道水道のあまで産湯産湯とあびて。お乳乳母母え

日傘日傘。陣陣春春の米米と食食こあひまま小間小間のあまをぬり

産湯産湯のまんとんん四四角角のあま。りふ月月がふてて産産ま入入な

まつらぶらげあや。江戸江戸之之芝芝居居臥臥腰腰小小うけやや面面が着着

扱扱名名代代のうままささ箱箱付付の兄兄いいごご誰誰ごとあま。へん。

つごも移移へ。一一さうごご。餓餓鬼鬼小小後後棒棒。鬼鬼小小亭亭と元元で

對對ま小小あつて移移入入奴奴等等ごり色色ど。江戸江戸子子をぬり

あつて四四丈丈とある場場が不便不便さふ。そらあうをばい

まげら。掃掃通通入入替替ごとあつてあつてあつてあつて

あつてあつて。モウかんけんして申申がら。一一足足踏踏

小小焼焼らそ。電電小小お月月さるをど遠遠くあつてあつて

あんまりいへばきのつる人おきりしと。下 統をささるてあつ
あへ村中での通りもの出まり。さまべとさまぢあはして和賄
の酒宴とさる。さうく者を送る中あも。さるの駈より
りんどん積込十二之積かきねて。サアくさきでもお者や
蓋とあけてさうおきと。田舎料理の温純さあひの
舞はまもてさうど

○判官志のながく

田舎小似合ね
地割りの景物。
是を榮番のこころとて。
さうさうの二編く

三編五段目六段目さうさう著述のうらさ
来年お板をへお覧いそのさあおあさ
お評判さうさうさあおさ

板元

艶拭巾

代三拾六編

全銀銅鉄塗物糸をぬらひてほやを
ゆ〜又之味後の糸をささるてさ
ささるてあはささる妙也

玉樞丹

小包代八拾五編
大包代百十二編

皆一をさへほささるさあおさ
ささる〜ささるさあおさ
其の不能ささるさあおさ

田舎芝居忠臣藏二編卷之下 畢

式亭家製薬品目録

升ろののろくの茶

代百文

ゆきかの大妙茶

ゆきかの大妙茶

江戸の水

代百文

逸来坊と名茶あまのえ徳のる名茶此政の上の茶と名茶

他家小類茶

金勢丸

代百文

酒の酔とさか酒どろの酔ひ飲の毒をけ
まはけ後一及の妙茶且淫毒小奇特あり
諸病小昂功ありゆゑ強弱いりふ不及也
懐中へ酒法の九茶なり

湯目あゝひろり

龍樹散

代三十五文

龍樹散善治秘方の良茶幸来たり
そとる由安あゝひろりの湯目あゝひろり
一日用とてかきうゝむを治すとす妙なり

小児百日せきの奇茶

代百文



